

総論

満点	100点	目標得点	70点	試験時間	90分	偏差値	法律:76 政治:75
大問数	1						
【問題難易度】		C ※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す					

Topics

- 1：現状私立文系最難関の慶應法学部であるが、英語と歴史で一定の点数をとらなければ、小論文（正式名称は「論述力」）は採点してもらえないことに注意が必要である。過去のお茶ゼミ生受験者から推測するところでは、単純計算で少なくとも5割を超えないと厳しい。その上で、英語と歴史でボーダーラインにある人ほど、「論述力」の出来が合否を左右する。
- 2：ここ数年、現代社会について考察を要求するような出題が続いてきたが、今年度は大きく変化があり、古代ギリシアに場面が設定され、都市国家の市民としてどのような決定をすべきかを書くものになった。広い意味で国際政治に関わる出題だと言え、それだけなら過去にも出題例はあるが、今年度は、古代ギリシアに場面が設定されているので、現代国際政治について言及は求められていない。
- 3：ここ数年は課題文の要約説明がまず求められ、07年度は500字、08・09年度は400字となっていたが、今年度はそれもなく、1000字すべてを自分の意見に費やしてもよくなった。上記を総合すると受験生にとっては厳しい出題であり、総じて、高く評価されるような答案を書くのは難しかったのではないだろうか。特に日本史選択者にとっては、課題文を理解することすら難しいかもしれない、「史実との適合性を考慮する必要はない」と設問中にあるとはいえ）酷であったろう。

こんな力が求められる！

- 1：何より英語と歴史の私大トップレベルの力を前提とすれば、慶應法学部の論述力は、基本的論文力以上のものは求められないと言ってよい。例年問題冊子表紙にはその内容が、採点の観点（理解力・構成力・発想力・表現力）として明記されているが、要するに、多少難しい課題文を読解・要約し、それに基づいて自分の意見を論理的に述べる力である。
- 2：ただし、設問の要求が毎年変わるのも、それに柔軟に対応できる力が必要である。今年の問題は、2006年度以来の大きな変化と言うべきものであったが、要は、課題文中にあるアテーナイの「帝国主義的膨張」（設問中の表現）に対して、あなたがラケダイモン（スパルタの自称）の市民として主戦論を取るか、非戦論を取るかということであり、いずれを選ぶにしてもその理由が書いてあれば最低限、筋の通った答案はできるはずである。あとはその理由に説得力があるかどうかである。
- 3：仮に今年度のような大きな変化があったとしても、それに耐えて堅実な論理展開ができるようになるためには、過去問（できれば慶應他学部の問題も含めて）演習が最良であり、お茶ゼミ「論文」の授業ではこれを徹底的に行っている。特に文学部と併願する人はその過去問も共に演習することによって、一石二鳥の効果が期待できる。

予想配点	理解力 20/100 点	構成力 30/100 点	発想力 30/100 点	表現力 20/100 点
時間配分の目安	90 分			
字数	1000 字以内			
出題形式	課題文型			
設問形式	意見論述			
出典	トゥーキュディデース『歴史』小西春雄訳			
難易度	C ※問題難易度：C 難問、B 標準、A 平易、を示す			

●注目すべきポイント：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科としての予想採点基準を提示する。

理解力：ラケダイモン（以下L）のいわば（I）「大国に圧迫されている国の論理」と、アテーナイ（以下A）のいわば（II）「世界秩序を担う大国の論理」との対比が正確に読み取れているか（20点相当）。

（I）Aによるギリシアの「奴隷化」を可能にしたのは、Aの進歩的性質（「進取の気性」とLの保守的性質（「他を傷つけない代わりに自らも傷つけられないで守れると思っている」）によるものである。同盟国も含めて自らを守るためならば、休戦協定を破って開戦することは不正ではない。

（II）Aの支配はペルシア戦争以後の状況によるやむを得ぬものであり、非人道的なものではない。それは弱肉強食に基づくものであっても、他国に比べれば平等を重んじ、寛容な支配である。開戦によって予想される損害を回避するためならば、開戦よりも協定に基づいた紛争解決をすべきだ。

※上記（I）（II）の内容理解の正確さ、対比の明確さに応じて、C評価（12点）を基準に評価を上下する。A評価（18点）、B評価（15点）、D評価（9点）、E評価（6点）

構成力：答案全体の標準的論理構成として、以下のいずれかの構成を取っているかどうか。（30点相当）

主戦論：上記（I）の立場に立ち、開戦した（or しなかった）場合のメリット（+）とリスク（-）を想定し、両者を比較したうえで、 $(+) > (-)$ （or $(+) < (-)$ ）となる根拠を示している。

非戦論：上記（II）の立場に立ち、開戦した（or しなかった）場合のメリット（+）とリスク（-）を想定し、両者を比較したうえで、 $(+) < (-)$ （or $(+) > (-)$ ）となる根拠を示している。

※上記論理構成の整合性に応じて、C評価（15点）を基準に評価を上下する。A評価（20点）、B評価（18点）、D評価（12点）、E評価（9点）。

発想力：主戦論にしても非戦論にしても論理に説得力ある内容が与えられているかどうか（30点相当）

例：主戦論 （+）：Aによるギリシアの奴隷化から解放することができ、自国を防衛できる。

（-）：戦争に敗れた場合、Aによるさらなる奴隷化に甘んじることになる。

$(+) > (-)$ ：このままLの保守的性質を維持するだけで開戦しなければ、Aによる奴隷化が進む。Aは決して奴隷化ではなく寛容な支配だと言うだろうが、現在そうだというだけで、その寛容さをいつ失ってもおかしくはない。そうなる前に開戦したほうがよい。

非戦論 （+）：開戦しないことでLは自国の安全の維持に国力を集中できる。

（-）：Aによるギリシアのさらなる奴隷化を黙認するだけである。

$(+) < (-)$ ：Aの言う寛容な支配を受け入れた方がよい。それにはAによる奴隷化に歯止めがかからない危険性はあるが、開戦して敗れた場合には、Aによるさらなる奴隷的支配に甘んじることになりかねない。ゆえに、開戦せず協定に基づいた解決をすべきである。

※こうした内容の説得力に応じて、C評価（15点）を基準にして評価を上下する。A評価（20点）、B評価（18点）、D評価（12点）、E評価（9点）。

表現力：高校生として当然求められるべき正確な表現（表記も含む）ができているかどうかに応じて、C評価（12点）を基準に評価を上下する。A評価（16点）、B評価（14点）、D評価（10点）、E評価（8点）

補足 1：主戦論の立場であっても、現状維持と和平交渉をできる限り続けたうえで、やむをえない場合は開戦という方策も可。

補足 2：過去の出題傾向からすれば、事実上非戦論で書くことが求められている可能性も否定できないが、主戦論を書いて合格したお茶ゼミ生もいる。